

## 四・宇田家最後の当主、美知の短歌から昭和の時代をたどる

関根 芳孝

旧見田方村（現在の越谷市大成町）の名家、宇田家最後の当主美知は、妹の桂子とともに幼少より祖母から和歌や書の手ほどきを受け、昭和二年、二六歳でアララギ会に入会し、斎藤茂吉や土屋文明から教えを受けた。美知のまとめた歌集「蓮の花」から、昭和の時代の世相や宇田家や近隣の生活の様子をたどってみた。

（昭和二年）御髭を白しと歌にのたまひしを思ひ出でたり御前に居て

添え書きに「青山アララギ発行所にて始めて斎藤茂吉先生よりみ教を給ふ」とある。この時代に越谷大相模から東京の青山などに出かけること自体が大変なことだったと思われるが美知や桂子はしばしば歌にしている。千住の横山家が母親の実家だったせいもあり其処を拠点に広く行動していたと思われる。さて、斎藤茂吉は言わずと知れた昭和の大歌人である。アララギ会を主宰し多くの作品を残し一時代を築いた。

（昭和三年）遠からぬ茨城の野に地響きて星落ちたりと聞くは恐ろし

隕石が落ちた報道に接して詠んだものと思われる。調べてみると昭和二年四月に稲敷郡阿波村に隕石が落ちている。この隕石はその破片が少女に当たったという非常に珍しい事例として新聞でも大きく報道され世界的に有名になったそうだ。幸い少女の命に別状はなかったとのことだが人々の驚きは相当のものだったのだろう。

日の本は菊盛りにて大君は今日高御座のぼらせたまふ

寿ぎの灯入ると農夫等も夜な夜なつくる大提灯

昭和三年一月一〇日京都御所にて昭和御大典の大事業が挙行された。都から遠く離れた農村においても国を挙げての大号令のもと祝賀ムードだったのだろうか。農作業は忙しく生活も決して楽ではなかったなかで農民が夜なべして大きな提灯を作ったことだろう。

（昭和四年）目をつむり上野の戦争話し居りわれの祖母よ照る陽のなかに

母の生家である千住横山家にて詠んだ歌である。日本最大の内戦、戊辰戦争のなかの上野における激戦（一八六八、七、四）を実際に肌身で体験した祖母の実感を伝え聞いた際の情景が目につかぶ。

（昭和五年）ひらかれし黒き御門のうちそとに盛りの花をしばし眺めむ

春の陽が木の間差し入る庭のうち馬のひとむら繋がれにけり

澄宮殿下鴨御狆という題による連作のうちの二首。澄宮殿下とは昭和天皇の弟君である三笠宮崇仁親王で大正四年にお生まれなのでこの当時一五歳か。殿下ご一行が越谷の鴨場にお越しになった際の歌で、美知はこの時この場所に居合わせたということだろう。今も黒い門は変わらずあるが、何頭もの馬を繋ぐ広い場所も鴨場にあったのだろう。

（昭和六年）人造人間うつそ身人に似るを見つ何か哀れをおぼえて去りし

百貨店にて、という題なので人造人間とはマネキン人形のことだろうと調べてみた。大正一四年に島津マネキンが誕生し国内初の洋装マネキンが作られた。美知が百貨店でマネキンを見たころはまだ出たてのころで見慣れなかったことだろう。「うつそ身人」とはこの世の人とか生きている人という意味の古語である。

（昭和七年）憂ひつつ来し農夫等に戦争は止むとふ記事を読みてきかせつ

兵士等が命果てにしあところ国新しく建ちて祝へる

昭和七年は日本が中国大陸で軍事行動を拡大した時期にあたり、主な出来事として一月の上海事変と三月の満州国建国があげられる。戦争が止んだとする新聞の記事を世情に疎い農村の人々に聞かせたことを歌に詠んだが、戦争は日本の敗戦まで延々と続いてしまうのであ

る。二首目の「あとどころ」とは足跡のような意味で、日本兵の多くの犠牲のもとに満州国の建国がなったことに美知はふれている。

(昭和一〇年) 田の中の寂しき家に出羽ヶ嶽の撒きし福豆拾ひて帰りぬ

出羽ヶ嶽はこの当時三二歳の巨漢力士である。当時から非常に有名な力士だったがその巨体ゆえに心の痛む話も多い。山形県に並外れて大きな子がいるということでは研究目的で東京の斎藤医師(茂吉の父)に引き取られ青山中学に通学するも大相撲から誘われて入門。さば折り等を武器に最高位は東の関脇であった。身長二〇五cm、体重一八〇kg、その後長く日本史上最重量の人といわれた。大ききゆえに大相撲でも人気力士で二年間も土俵に上ったが当時の実況アナの「大男、総身に知恵が…」が名調子ともてはやされたという。しかしそれに反して賢く大変器用で多趣味だったという。小動物を愛玩する優しい人物で「おい、犬と猫頼むな」と夫人に言い残し四七歳でこの世を去った。遺体は研究のため東大医学部に保存されている。歌人茂吉は出羽ヶ嶽の親密な後援者の一人で、茂吉や子息等の短歌や小説にもこの力士が登場している。美知の詠んだこの歌は、察するところアララギ会の関わりで出羽ヶ嶽の行う豆撒きに参加した時のものだろう。

(昭和十二年) 此秋は戦争止まず軽減されし税の貯蓄をすすめ来たりぬ

昭和十二年は日中戦争に突入した年で戦費調達を目的の増税が中心だった。税の貯蓄とは人民でなく国家にとつての貯蓄ということだろうか。軽減されしというくだりは、落ち着いていた税金が上がるということなのか。どなたかに教えを乞いたいところだ。

(昭和十三年) こぞの秋吾の行き来に乗り合いし出征兵の命をぞ思ふ

前年の秋のことを年明けに詠んだものか、美知のいつも使う通勤列車に乗り合わせた出征兵たちの行く末を案じる歌である。年ごとに戦争が激しくなり出征する若者を見かけることが多くなったのだろう。

おこい

(昭和一六年) 国の急今や至ると大君に大臣は夜半にま見えまつりき

「一二月八日宣戦の大詔降る」とある。日本が真珠湾攻撃を行い太平洋戦争が始まった日である。ラジオが新聞か、美知が報道で得た重大ニュースをそのままに詠んだものだろう。よほど心を動かされたに違いない。

(昭和一七年) 轟きてマニラは燃ゆる凄じき時の動きの中に生きゆく

太平洋戦争勃発とともに日本軍はフィリピンに侵攻し、連合国軍と激しい戦闘を開始し、六月には日本軍がフィリピン全土をほぼ制圧した。首都マニラの攻防でマニラ市内は黒煙が上がり炎につつまれた。ちなみに当時のアメリカ軍司令長官はマッカーサーである。

(昭和一八年) わが祖先ねむるみ寺のこの鐘を熔きて戦ふ御代に逢ひたり

幾世かも祈を籠めし寺の鐘今ぞいで征く撃ちてし止まむ  
刻まれし明和の文字を読み合ひて土に置きたる鐘を囲めり

「鐘を送る三首」とある。戦時下の日本で兵器製造に必要な金属が不足したため、国は国民に鍋や釜、仏像、銅像、寺の梵鐘などを強制的に供出させた。この鐘は宇田家の菩提寺、浄音寺の梵鐘であろう。今では新しい鐘が铸造され鐘楼に吊り下げられている。

(昭和二〇年) にはかにも爆音きしむ墜ちたりき一瞬にして土盛り上る

田の中に戦ひ墜ちてしはし燃ゆ焰にむきて吾等合掌す

日本機の墜ちしを悼む田の中に空襲解除のサイレン響く

「悼日本機 九首 四月一二日」とある。調べてみると、四月七日、B二九爆撃機を迎撃中に被弾した日本陸軍の五式戦闘機が市内大吉の水田に墜落している。見田方と大吉は少し離れてはいるが、墜落時の轟音やサイレンの音が聞こえたのか、または伝聞から詠んだものか。終戦近い空襲下の出来事であり、大吉の人々の記憶に深く残っているという。

（昭和二〇年）萬葉集と原子爆弾むらぎもの心にありて今日ひと日過ぐ  
柔かに英語聞こゆるラヂオの前心は和ぎて佇みて居り  
さまざまの叫び聞こえて日々は過ぐみ国はいかになりてゆくのか

「戦後の詠 三首」とある。「むらぎもの」とは五臓六腑を意味し心を強調する。読み親しんできた万葉集と強烈な印象の原子爆弾が頭から離れないと解するのか。あとの二首、「英語」や「叫び」は、戦時下から解放された自由や新しい時代を表している。

（昭和二十一年）選挙してきたりし母よたまきはる長き命を喜びて居り

戦後の選挙法改正で女性に参政権が認められ、初の選挙が昭和二十一年四月十日に行われた。美知の母が選挙から帰って長生きしてよかったと言っているようだ。「たまきはる」は命にかかる枕詞である。

（昭和二十二年）秋茄子も金に代へたり険しかる時の動きのままに生きむとす

日々の厳しい生活のなかで美味しい秋茄子も食わずに売って暮らしの足しにしよう。

嵐止みてしづけき庭に利根の土手切れしを叫ぶ人声聞こゆ

増水の渦巻くなかに足に触れ育つ甘藷を掘りとりけり

大野良に寄せ来し水がなほ溢れ元荒川に落つるこの音

「出水」と題して二七首あり。九月一六日に来襲したカスリーン台風の甚大な被害を詠んだもので、増水が元荒川に流れ引く時の大きな音を詠んだものが三首ある。これらの歌から相当な規模の出水だったことが分かる。

（昭和二十三年）伝わりし土地は移りてゆきたれど残りしものを頼むこの頃

「農地改革の後に」と題し何首か当時の様子を詠んでいる。先祖からの広大な農地を小作人に解放し、残されたいくらかの土地からの収穫をあてに生活を営んでいる心境か。

（昭和二十八年）師の御声聞こゆる如く歌の道励まむ心吾に湧きたり

「斎藤茂吉先生みまかり給ふ 二月二五日」美知と桂子の歌の師であった斎藤茂吉の死。

昭和二十五年に美知は母と姉（三女）を相次いで亡くしてもいる。

（昭和三十三年）花びらの如きとさかの鶏を牡丹と名づけいつくしみ飼ふ

「鶏を飼ふ 七首」のひとつ。養鶏を始めて日々の世話に追われる中にも遊びの心が。

（昭和四十二年）松切りて松の匂へる庭のうち涼しき風の吹き通りゆく

「門前の老松を切る 年輪百十五」長屋門の前にあった大木を伐る。

（昭和五十二年）和宮様の御下賜品とおもふ文箱ひとつ仏壇に納め祖母も母も逝きぬ

皇女和宮として有名な徳川幕府一四代將軍家茂の正室から、宇田家に下賜されたという文箱は家宝として特に大切にされてきた。今は所在不明である。

妹と職を覚えてひたすらに護りこし門文化財となりぬ

（昭和五十三年）耳に鉛筆をはさめる人らつぎつぎに古き吾が家を見むとつどい来

草生ふる宅地の中に貧しきに山河の石買へと人強ふ

門も母屋も百年越えてなほ久し古きがなかに吾の生れき

文化財修理費用の希望書に半々と書く吾が家なれば

汝が骨を納むる墓のあらずして未だも仏壇にありて語らふ

美知は昭和五四年に歌集「蓮の花」を上梓したのでこの年の作品が最後である。妹の桂子は七年前に他界し埋葬はまだだったようだ。美知は、歌ではかなわなかったと認める桂子の遺稿を整理して歌集の後半に載せている。桂子は千住の横山家や名倉家で詠んだ歌も多く、昭和五年に完成したばかりの荒川放水路の情景をいくつか詠んでいる。そのひとつを紹介して本稿の終わりとする。

（昭和五年）放水路水の流れも変わるらむこにして今帆を上ぐる舟（桂子）